

## 《特集》 韓国朝鮮語歴史研究・音韻論研究 （福井玲先生退職記念特集）

2023年3月、韓国朝鮮文化研究室・福井玲先生が退職されることになりました。福井先生は1957年岐阜県飛騨地方に生まれ、岐阜県立斐太高等学校卒業後、1976年に東京大学理科一類に進学されました。もともと理系科目よりも英語や国語の方が得意であり、語学や文学に興味があったという福井先生は、その後理工系の学部ではなく、東京大学文学部言語学科に進学されました。ご自身の方言である飛騨方言への関心から、修士課程では日本語のアクセントの方言間比較をテーマに研究されていましたが、博士課程に進学後、韓国朝鮮語を含む日本周辺の諸言語を学ぶ中で、日本語と似たピッチアクセント体系が韓国朝鮮語方言にあることに強い関心を持たれました。1984-1986年にはソウル大学に留学され、韓国語歴史研究の大家である李基文先生を始め、多くの著名な先生方の指導を受けながら、韓国朝鮮語の歴史的研究に取り組みられました。留学後は、東京大学文学部言語学研究室助手、明海大学外国語学部日本語学科講師、東京大学教養学部助教授を経て、2002年8月より東京大学大学院人文社会系研究科（韓国朝鮮文化研究専攻）にて教鞭を執ってこられました。

福井先生の退職を記念して、何かできることはないか、現在韓国朝鮮文化研究室に所属している指導学生たちを中心に話し合いが進められてきましたが、福井先生の元指導学生の方々、韓国朝鮮文化研究室のご協力も得て、本誌『韓国朝鮮文化研究』22号において、韓国朝鮮語研究に関する特集を組ませて頂けることとなりました。急遽提案された企画でしたが、現・旧指導学生から多くの論考を頂き、更にありがたいことに、福井先生からも論文をご寄稿頂きました。

福井先生はこれまで、韓国朝鮮語の歴史的研究、とりわけ音韻論研究に従事されてきました。中でも、韓国朝鮮語に関心をもつようになられたきっかけであるピッチアクセントの研究は、多方面にわたって行われています。まず訓民正音創制（1446）後、音調まで忠実に記録されていた中期朝鮮語（15-16世紀）に関しては、助詞・語尾の音調パターンや、一種のイントネーションである句音調にも着目することで、句において最初に現れる去声（高調）の位置が最も重要な弁別の特徴である昇り核アクセント体系であることを、明確に示されました。また、現代韓国朝鮮語諸方言のアクセントについて、現地調査に基づく研究成果を複数残しておられ、それらの研究成果と、関連する先行研究を元に、韓国朝鮮語全体におけるアクセント体系の分布や、諸方言を通して観察される特徴を明らかにされるとともに、中期朝鮮語を含む各体系の相対的な関係について仮説を立てておられます。更に、朝鮮時代の音楽資料に反映された中期朝鮮語アクセントの分析や、地方刊行文献の傍点表記に見られる地域差、中期朝鮮語ハングル資料作成者の出身地の分析など、多角的にピッチアクセントの実態を捉えようとされている点も特徴的です。

アクセント研究の他、韓国朝鮮語音韻史における、様々な重要課題にも取り組まれてきました。たとえば、中期朝鮮語の音韻体系を考える上で大きな問題の一つである、sで始まる「s系複子音（consonant cluster）」の発音について、韓国の国語学会ではなかば定説となっている「濃音説」に対し、語頭に現れるものについては文字通りの複子音として発音されたとする「複子音説」を、数々の説得力ある根拠に基づき展開されました。また中期朝鮮語において、表記上は同一でありながら、二重母音と母音連続（hiatus）の区別があったと見られることや、

現代韓国語に見られる鼻音化・側面音化という音声規則の出現時期などについても指摘されていますが、これらのご指摘は、複子音の問題と併せ、先入観なく過去の言語資料を扱うことの意味について、改めて振り返らせてくれるものでもあります。中期朝鮮語研究を軸にしながら、そこからより古い時代の朝鮮語に関し、一つ一つの用例を丹念に検証しつつ議論されているのも先生のご研究の特色であり、その着実かつ堅実な姿勢は、先生ご自身が著書『韓国語音韻史の探究』（三省堂、2013年）で仰っている、「日本語の場合と同様に系統論的に不明の点が多い現状では、韓国語音韻史の研究はまず韓国語内部からいえることに限定すべきであると考えている」（p.157）というお言葉に如実に表れていると思います。なお同書で、韓国朝鮮語の歴史的研究について先生がまとめられている次の一言は、この言語の研究に携わる一人として、非常に深遠で象徴的な意味をもつものとして、心に残り続けています：「韓国語、特に中世韓国語は音韻論的にも形態音韻論的にも「複雑」な言語であって、そのこととさまざまな分布上の偏りを併せて考えることにより、より古い時代にさかのぼる研究を行うことは可能である。いい換えれば、韓国語はあたかも内的再構による研究を待っているかのごとき特徴をもった言語である。同時に中世韓国語の「記述」が非常に優れたものであったこともわれわれにとって幸いである。」（p.173）

韓国朝鮮語文献に関する書誌学的研究、語学的特徴から見た資料分析も、福井先生が積極的に取り組まれてきた分野です。『杜詩諺解』（1481）、『翻譯小學』（1518+）、『酉年工夫』（中村庄次郎1876年写本）など特定文献のご研究はもちろん、中期朝鮮語資料全般についての概説執筆や、東京大学小倉文庫所蔵朝鮮語文献の目録作成等、緻密な作業を元に貴重なデータベースを構築されています。近年では、小倉進平（1882-1944）による韓国朝鮮語研究を再解釈しようとする試みを続けておられ、とりわけ『朝鮮語方言の研究』所載資料による言語地図化プロジェクトを通じ、各語彙項目の歴史を立体的に提示するという、大変意義深い成果を残しておられます。

本特集にご寄稿頂いた福井先生の論考「小倉文庫拾遺」は、これまで継続してこられた小倉文庫所蔵文献研究に関するもので、小倉進平氏の旧蔵本のうち、2018年にご令息小倉芳彦先生から韓国朝鮮文化研究室に譲り受けた書籍および資料の目録とともに、注目すべき資料についての解説が添えられています。

福井先生は、韓国朝鮮語史の幅広い側面について、言語データの点と点をつなぐ、精緻な研究を積み重ねてこられました。穏やかで控えめなお人柄でありながら、常に強い信念を持ってそれぞれのテーマに取り組まれるお姿を拝見するたび、研究者として目指すべき到達点を目の当たりにしている思いが致しました。また、福井先生は、ご自身が韓国朝鮮語研究に関して「面白い」と考えておられる様々な点について、論文・ご著書は元より、講義や学会発表、普段の何気ない会話においてもしばしば言及されていますが、今振り返っても、それら数々のご指摘は、韓国朝鮮語史の本質を探る上で、重要な気づきを与えてくださるものばかりでした。本特集を通し、改めて福井玲先生のご功績と学恩に対し感謝の気持ちを申し上げると共に、先生の今後益々のご活躍を祈念致します。

2023年1月

東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 准教授  
伊藤 智ゆき